

## 「第22回日本臨床環境医学会学術集会」

(臨床環境22: 77-79, 2013)

## 学術集会を終えて

— 多くの出会いとふれあいがあった学術集会 —

第22回学術集会会長 佐藤 勉

日本歯科大学東京短期大学

平成25年6月8日(土)・9日(日)の2日間、北里大学白金キャンパス内の薬学部コンベンションホールにて、第22回日本臨床環境医学会学術集会を盛大に開催することが出来ました。これもひとえに坂部 貢学会理事長はじめ、役員の方並びに関係各位のご支援とご協力の賜物であり、ここに改めて感謝申し上げます。

本学会における私自身の会員歴は必ずしも長いものではありませんし、ましてや学会に対する貢献度も甚だ小さいものです。そのような私が学術集会の会長の大役をおおせつかったことは、身に余る光栄と思っております。

私は歯科領域の大学に勤務していますので、歯科関係の学会に多く所属しております。そのような学会活動のなかで、臨床環境医学会は間口が非常に広く、また日常生活と密接に関連している研究が多数報告されていることから、毎年楽しみに参加させて頂いておりました。ただ、歯科領域に関する論文や発表は必ずしも多くなく、若干寂しい思いもありました。幸いにも、第19回学術集会(坂部 貢会長)において、「フッ化物と健康」をテーマとするシンポジウムを企画させて頂きました。いつもは歯科領域の先生方とディスカッションをすることが多いのですが、このシンポジウムでは医科や学校保健関係の先生方と多くの意見交換をすることができ、手前味噌かも知れませんが、大変有意義な企画であったと考えております。また、第20回学術集会(森 千里会長)では、「生活習慣病としての歯周病」をテーマとするシンポジウムを開催させて頂きました。近年、歯周

病は全身の健康と深く関係することが明らかになってきており、また我が国では有病率も極めて高いことから、その対策が急務となっています。歯周病は感染症であると同時に、その発症や進行には様々な生活習慣が関与しています。なかでも喫煙習慣はもっとも重要なリスクファクターの一つです。このような疾患ですので、学術集会のシンポジウムに取りあげて頂き、多くの成果が得られましたことは大きな喜びでした。2年連続して、歯科領域の重要な問題である「フッ化物」と「歯周病」のシンポジウムを採択して頂き、これまで以上に本学会に対して熱い思いを寄せるようになりました。一昨年の学術集会の際に開催された理事会において、第22回の学術集会の会長を正式に仰せつかりました。本来なら、それから少しずつ準備を進めていくべきなのですが、元来のんびり屋ですので、実際に動き出したのは昨年の第21回学術集会(鈴木 達夫会長)を終えてからでした。南魚沼の学術集会には、いつもの学会出席時とは異なり、鈴木会長はもちろんのこと、会の準備・運営に携われた皆様の一挙一動に注目し、何でも吸収してやろうという気持ちで参加しました。その結果、帰りの新幹線では学術集会を引き受けてしまった事の重大さや責任の重さ等々、ずっしりと肩にのしかかってくるのを覚えた次第です。そして南魚沼学術集会の魅力ある企画と立派な会場、周辺の風光明媚さらには美味しい食べ物とお酒…、それらが全てプレッシャーとなつてのしかかってきました。とにかく準備を開始しなくてはと、坂部理事長のところにお伺いし、多く

のアドバイスを頂戴しました。会計や事務的なことについては山内 博先生に相談させて頂きました。特に実務的なことについては、蓑川 慶子さんのサポートが大変ありがたかったです。準備委員会を立ち上げ、まず会場選定やシンポジウムの企画からスタートさせましたが、分からないことが次から次へと出てきました。そんな時大いに助けて下さったのが、前回の学術集会で準備委員長をされた北里研究所病院の竹内 修先生でした。先生はお忙しい日々にも関わらず、いつも笑顔で快くアドバイスをしてくれました。きっと2年連続で準備委員長をしている気分ではなかったかと思えます。学会場につきましては、やはり北里研究所病院の土本 寛二先生と鈴木 幸男先生に助けて頂きました。このように、非常に多くの先生方に助けて頂きながら、準備を進めていきました。上記にお名前を挙げた先生の他にもたくさんの方々にお世話になりましたが、皆さん、言わば影の(真の?)準備委員としてご協力して下さいのだと思います。

恥ずかしながら、私は超アナログ人間です。準備委員長には超デジタル・ハイテク人間である本学の赤間 亮一先生にお願いしました。学術集会のホームページ作成からプログラム・抄録集作成まで、大奮闘してくれました。4月から附属病院へ移動されましたので、大変ご苦労されたことと思います。できるだけ手作り感あふれる学術集会にしようと考えていましたので、学会ポスターのデザインも本学事務職員の野口 直恵さんをお願いしました。「優しさにあふれた素敵なポスター」との声をたくさん聞くことが出来ました。

さて、プログラムを企画するにあたって、まず歯科領域における環境関連の話題を提供させて頂くことにしました。そこではじめに浮かんだのが、昨年の南魚沼学術集会で石川 哲先生とお話しさせて頂いた「歯科材料によるアレルギー」についてでした。先生も日常の臨床の場で時々遭遇されるそうですが、歯科材料とアレルギーの関係について医科の先生はあまり知識がないと話されました。そこで、本学附属病院の口腔アレルギー

外来・総合診療科の川村浩樹先生に「シンポジウム5：歯科材料とアレルギー疾患」と題する講演をお願いしました。歯科と医科が連携して診療にあたっている全国的にも珍しい本学の取組に、多くの方が興味を持たれたようでした。このシンポジウムの他にも3つの歯科関連シンポジウムを開催しました。

口腔の健康も出生時から接する様々な環境要因によって影響を受けます。そこで、小児歯科学をご専門とする本学学長の小口 春久先生に「シンポジウム1：全身の健康からみた小児の口腔の発育と環境」についてお話し頂きました。「シンポジウム2：喫煙と歯科疾患」と題するシンポジウムについては、歯周病の有病率は先進国のなかでも極めて高く、その対策が急務であることから、第20回学術集会に続き本学歯周病学講座の沼部 幸博先生にご講演をお願いしました。もう一つは、福島原発事故に関連するテーマのシンポジウムです。このシンポジウムを取り上げるか否かについては、繰り返し検討会を開きました。結果的に坂部理事長の「アカデミックな学会で、事実に基づいた講演であれば企画してもよいのでは」という一言に後押しされて、プログラム(シンポジウム6)に組み入れました。シンポジストは、20年以上に渡りこの研究に携わっておられる井上 一彦先生にお願いしました。個人的には今後も本学会で取りあげて頂きたいテーマと思っております。

歯科領域以外のシンポジウムについては、坂部先生はじめ理事の先生方から、企画の提案がありました。どの企画も魅力あるものでしたので、全てを採用させて頂くことにしました。その結果、割り当て時間が少なくなってしまったことは、ご講演下さった先生方に申し訳なく思っております。以下にテーマを掲げさせて頂き、改めてコーディネーターとシンポジストの先生方にお礼申し上げます。

シンポジウム3関連：「新規環境病 ―変貌する病への看護学からの挑戦―」(コーディネーター：村瀬 智子先生、今井 奈妙先生)、「新規環境病の理解に向けて ―自己・非自己循環理論の視点から―」(村瀬 雅俊先生、村瀬 智子先生)、

「日本における“Environmental Health Nursing”の模索」(今井 奈妙先生) シンポジウム4 関連:「日本における有機リン殺虫剤研究の歴史と人体への毒性」(石川 哲先生)、「日本人のネオニコチノイド曝露」(平 久美子先生)、「自閉症・ADHDなどの発達障害の概説(原因と発症メカニズム): 遺伝と環境の相互作用 — 遺伝子背景と引き金を引く農薬などの環境毒性化学物質—」(黒田 洋一郎先生)、「農薬曝露と子どもの発達障害に関する疫学研究」(Maryse Bouchard 先生)、「発達期脳における農薬ネオニコチノイドのニコチン様の影響 — ADHDなどの発達障害発症の危険因子としての可能性—」(木村-黒田 純子先生)

なお、シンポジウム4は国際シンポジウムとして開催されたことから、海外の研究者も多数参加されました。

特別講演については、私の古くからの友人でもある情報・システム研究機構 国立極地研究所の宮岡 宏先生にお願いしました。日頃の学生教育において、環境問題について取り上げる機会は多いのですが、もっと違った観点から取り上げる必要があるのではないかと、この数年自問自答を繰り返していました。得られた答えの一つが「極地観察からみた地球環境の変化を考えてみる」というものでありました。近年の気候変動や環境変化をみると、地球規模で観測を続けている極地研究所の先生のお話を聞きたくなり、宮岡先生に特別講演を依頼しました。ご講演の内容は全てが新鮮で興味深いことばかりでしたが、特に驚いたことは、北極や南極の自然環境が地球全体の自然環

境に大きな影響を与えているということでした。今後の学生講義では、よりダイナミックな観点から地球環境の変化や健康影響について話題を提供していきたいと思います。

手作り学術集会の目玉の一つとして、楽しい懇親会を考えました。一人でも多くの方に参加して頂きたく、会場は大学内の食堂をお借りしました。そして、食べ物も飲み物も質・量ともに満足してもらえるよう、食堂を担当する業者さんと何度か打ち合わせをしました。そして懇親会のイベントには、私の独断と偏見で「鏡開き」を行うことにしました。ところがこの時期は、こも樽に用いる木が調達出来ないということが判明しました。何とか知り合いの酒屋さんをお願いして3斗樽を届けてもらい、「祝学術集会」の鏡開きが実現出来ました。中身は2斗ということでしたが、ほぼ完飲だったようです。お酒の飲めない方には申し訳なかったです。

最後になりましたが、2日間の学会を無事終了することが出来たのは、多くの役員・関係各位のお力によりますことは元より、学会に参加して下さった全ての皆様のおかげと深く感謝申し上げます。学術集会の運営に不慣れな大会長でしたので、不備不手際が多々あったかと思いますが、何とぞご容赦のほどお願い申し上げます。

来年は高野 裕久先生を大会長として、京都大学で開催されます。趣のある古都で、学会員の皆様と再会出来ますことを楽しみに学術集会報告を終えたいと思います。